

感性、物づくり、物語 —共感の世界の広がりと繋がりを考える—（全 12 回）

第7回 なぜ、共感が注目されたのか

長島知正（早稲田大学理工研招聘研究員）

1) はじめに

大雑把に、人には理性的な人と感性的と呼ばれる人に分けて語られることがあります。前者は合理的な考え方に、後者には感覚経験に信を置いているという違いが認められるという時に使われているようです。このような分け方にどれだけ意味があるかは別にして、現在“合理的”と云われている考え方を遡ってみると、その代表の一人として、近代を拓いたとされるデカルトを挙げる事が出来ます。それに異を唱える人は少ないでしょうし、合理的とは理にかなうということであることも敢えて説明を要しないと思います。

前回、共感の典型的な意味を探るため、18世紀の西洋の近代化で活躍したルソーやスミスの考えを取り上げて、簡単に紹介しました。今回は、共感と云う考えがどうして問題になったのかを考えたいと思います。そのため、共感と云う考えが登場した時代背景や状況について整理しようと思います。

我が国とは異なった風土や歴史を持つ国の思想などをしっかり理解するために、特にそのような知識の不足する場合には、こうした整理は不可欠な事です。

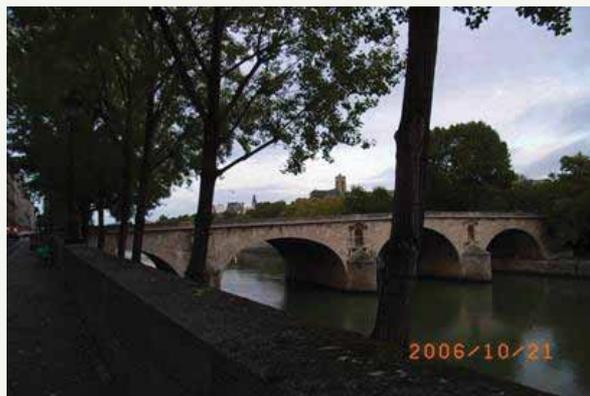
ここで、このシリーズの隠れた狙いについて、触れることをお許しいただきたいと思います。このシリーズは、ご覧いただけるように、「感性、物づくり、物語」と云うタイトルですが、一体具体的にはどういう人を読者に想定しているか不可思議に感じる人も多いのではないかと思います。著者の執筆の意図を手短に言うと、我が国における理系と文系の壁に梯子をかけることです。更に対象を狭めれば、物があふれる時代の物作り、特に人間と工学との基礎的な考え方の構築にあります。そのために、現在我が国では全く欠けてしまっているかに見える「理工系のための哲学のすすめ」をスケッチする事が著者このシリーズの狙いなのです。ですので、文系の人達や専門家には回り道に見えたとし

でも、決して無駄になる事はないはずです。

これから取り上げる予定でいますヒュームは前回取り上げた、ルソーやスミスがそれぞれフランス革命や国富論によって広く知られているほど有名でないと思いますが、彼はスミスの友人であったほか、カントに強い影響を与えたと云われる思想家です。その理由は、ヒュームは観念の連合を人間の知的活動と考えていましたが、その基礎として、感覚経験以外を信じないという経験論を代表する人物だったからです。今回はヒュームを代表とする感覚を基にした経験論とはどういう物であったかをまず取り上げます。

2) 共感は何故問題になったのか？ —合理主義と経験論—

西欧では教会の権威が支配した中世から、人間がすべてを決めなければならない近代への移行において、人間の理性による世界の掌握の道を迸択しました。それをはっきりさせた代表的人物としてデカルトの名を知らない人は我が国では僅かでしょう。つまり、デカルトは近代の思想と近代的科学の礎を築いたと云われているのです。デカルトの思想は基本的に現代の科学的で、理性を中心とした思考の体系に受け継がれていると云えるでしょう。しかしながら、私たちは、近年そうした西欧に発する理性的な思考の限界とも思われる、解決困難な大きな社会的課題に直面しています。私達は何か従来 of 思考の枠内で解決する道が見いだせるのでしょうか？



著者にはそれは分かりませんから、別な事を考えています。従来成功した思考方法と云えども万能ではないはずです。つまり、従来 of 思考のもつ特徴を検

討して、弱点や欠陥を克服することで、解決困難にみえる問題へ対処する道を見いだせる可能性があるのではないかと考えています。そのために、歴史を振り返る訳です。デカルトの合理主義の考えには、その当時異を唱える人たちもいました。イギリス経験論と云う名で呼ばれる一群の人達です。

その中に、ロック、バークレイ等の名が挙げられますが、その中心人物がヒュームと見做されています。

経験論と呼ばれている人たちの考えに共通する特徴として、何よりも人間の感覚したことを重要視し、感覚したことが経験の基礎となり思考にまで及ぶとすることに見られます。経験論の流れはその後、歴史の表面からは消えてしまったように見えますが、何故なのでしょう。その消息をたどってみることにします。

経験論の立場の人達が注目したのは、合理的な思考の対象となる観念は生得的、つまり生まれたときから与えられているものとするものでした。もし、それと反対に、生得的な観念を持っていないとすれば、赤ちゃんのように、何も経験していない人の心は、「文字を一切欠いた白紙」、タプラ・ラサの状態にある。だから、何かを考えるためには、外界からの感覚を経験し、何らかの印象を受け取らなければならないということになります。

経験論の始祖と云われるロックは、生得観念を否定して、あらゆる観念の起源は経験にあるとして、我々の知識とは、経験によって得られる「諸観念の結合と一致、不一致と背反に他ならない」と結論しました。

なお、合理主義者のライプニッツは生まれたばかりの赤ちゃんがいかなる生得観念をもっていないという証拠はないとし、潜在的にあるにも拘らず、意識されていないだけではないかと考えました。このような合理主義者のライプニッツの考えと経験論の双方が、後にカントの純粋理性批判の成立に強い影響を与えています。それは、純粋理性批判の冒頭、カントは「認識のすべては経験から始まるとしても、あらゆる認識が経験から始まる訳ではない」と書き出していることにはっきり現れています。

3) ロックの観念の分類とヒュームの観念連合

人間が考える時、知性の対象となるものをロックは観念と考えますが、そうした観念には、経験により2種類あり、色、熱、甘さ等は感覚による観念、考える、疑う、信じる等は自分の心を内省的知覚することにより得られる観念としました。また、観念は単純観念と複合観念に分かれる。単純観念はそれ以上分割できない観念であって、経験によって得られる。そうした単純観念から組み合わせにより、新しい複合観念を作ることが出来るものとなりました。観念を単純観念と複合観念に分けて区別することは後のヒュームも同様に行っています。

一方、ロックは、物体のもつ性質を第一性質、第二性質に区別しています。ロックに依れば、物体の第一性質とは、物体から分離することが出来ない性質で、延長(広がり)、重さ、形等を、また、第2性質は、音、色、香り、味等の感覚的な観念を我々の内に作り出すとした。しかし、経験論の立場では、与えられるのは経験的に得られる観念のみで、物体の性質自身は与えられないはずであり、ロックの経験論には、実在論との関係であいまいさが見られます。

それに対し、ヒュームの経験論ははるかに周到に検討されているようです。18世紀に発表されたヒュームの考え方は、経験論というレッテルが張り付けられているせいでしょうか、今日ではあまり注目する人はあまりいないと思われます。しかし、経験論は批判される点があるとはいえ、すべてが無意味ともいえないのではないのでしょうか。私達は自分たちのことや身の回りのことを余りにも知らないことを自覚しているのでしょうか？ それは、特に理性に絶対的な信を置く、自然科学者に考えて欲しい点なのです。

ヒュームは、私たちに知覚され心に現れる表象を「印象」と「観念」に区別します。ヒュームによれば、印象とは私たちの心に直接に現れる感覚、感情などで、一方、観念は、記憶における印象の反復したものです。つまり、観念とは、印象のコピーであり、それらの違いは生気の程度の違いに過ぎないと考えます。観念が心に浮かぶためには、それに先立つ印象が与えられなければならず、生得観念といったものは存在しない。印象が与えられれば、そのコピーで

ある観念は自由に現れる。ある観念には互いに結合に連合する、観念連合が出来る。この観念連合をヒュームは知的活動の原理と見做しました。ヒュームの考えでは、共感もその一部に含まれるものです。

ヒュームの共感の意味を明らかにするためには、知性についての彼の見方(—それは決して単純なものではありませんが—)、に立ち入る必要があります。次回、ロックの知性観と比較しながら、ヒュームの経験論における共感の意味を考えたいと思います。そこに、現在の知性を巡る考えの枠組みとしての、Symbolism と Connectionism という二つの源流を見ることが出来るのかもしれませんが。